予告　秋彼岸　９月２１日午前１１時～

秋彼岸法要　九月二十一日（日曜日）　午前十一時から

彼岸法要後

落語一席／柳家喬の字

昨秋は、柳家さん喬師匠の落語「井戸の茶碗」をきいた彼岸法要でした。その時、前座をつとめるはずだった喬の字さん。高速道路の渋滞に巻き込まれて、お師匠さんだけは新幹線で駆けつけたけれど、間に合わなかったので昨年のリベンジ寄席です。ご期待ください。

予告　妙心寺微笑会　信を深める旅

10月21日・22日

本山妙心寺の文化財護持を目的とした組織に微笑会（みしょうかい）があります。会長は稲盛和夫氏です。松岩寺の檀家さんでも数名の方に入会していただいてますが、この会の総会が今年は十月二十二日（水）にひらかれます。

その前日に信を深める旅が企画されます。これが、毎年良い企画です。普段は門を閉じている非公開文化財の鍵をこじ開けてくれます。本山・妙心寺でなければできない催しです。

今年は長岡京市・光明寺周辺を散策する計画のようです。会員（年会費壱万円）以外でも数名ならば参加できます。松岩寺で企画してきた本山団体参拝はしばらくお休みするかわりに、微笑会の「信を深める旅」の情報をお伝えしていきます。詳しくはお施餓鬼の当日、あるいは秋彼岸法要のお知らせと一緒にお届けする予定です。

編集後記

□右の遺偈ですが、末句の「夢の中で夢も忘れた」というのは味わい深い言葉です。遺偈ではそうは言っておられるけれど、最期まで鋭敏な判断力を失わなかった方でした。ところで夢の辞世というと、松尾芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を思い出します。辞世の句としてしられていますが、これは人生最後によんだ句で辞世ではないらしい。末世の句を求める弟子たちに向かって次のような言葉をのこしたといいます。「わが生涯のうちに作った句が、すべてわたしの辞世だ」、と。

□私が修行したのは埼玉県新座市の平林寺です。敷地が十五万坪あり、境内全体が国の天然記念物に指定されています。師の容体が悪化したと知らされた五月中旬から密葬本葬と続き、足繁く通っていますが、こんな凄いところに九年もいたのかと、改めて思いを新たにしています。

□ところで、平林寺の森の中に、ひっそりとたたずむ侘びた自然石の墓石に、実業家の名前を見つけることができます。松永安左エ門の墓です。戦後の電力体制を作った「電力の鬼」は、福島原発事故以後、ふたたび注目されています。

□その墓石をめぐっての拙い原稿が月刊『大法輪』六月号に掲載されました。四月以降、仏教の総合雑誌としては唯一の月刊誌に隔月で連載を書く機会を与えられています。次回は七月八日発売の八月号に、「あのフレーズは経典の一節だった」と題した原稿を書きました。一般の書店で購入できますから、読んでみて！

一冊８６４円です。（住職記す）

不連続シリーズ「見ーつけた」

立派な禅僧には遺偈（ゆいげ）というのがあります。死に臨んで、その心境を漢詩に託すのです。辞世の句です。

遺偈をめぐっては、たくさんの禅僧の多くの逸話がのこされています。その中で、私が一番好きなのは、江戸時代の禅僧・仙涯義梵禅師の最期です。仙涯さんは「○□△」などユーモアある墨跡で有名ですが、そんな禅師も八十八歳。死の床に伏します。床を取り囲んだ弟子のひとりが、仙涯にお願いします。

「和尚さま、最期に何かいい遺偈をのこしてください」

仙涯は答えました。

「死にともない。死にともない」

弟子は言います。

「天下の名僧ともあろう方が、そんな見苦しいことでは困ります。もう少しましなことをいって下さい」

仙涯はふたたび応えました。

「ほんまに、ほんまに」

弟子の期待するように、もっともらしい漢字ばかりの詩をひねったならば、仙涯さんらしくない。ここは、やはり「死にともない」しかないのです。

ほんとうにそう言ったかは不明です。後になって誰かが創作した逸話だとしても、その人らしさをよく表した「滅後の肉声」です。

さて、私の膳の修行道場時代の老師（師匠）が五月下旬に遷化（せんげ＝逝去）されました。八十七歳でした。二月初旬から体調をくずし、入院しました。悪性リンパ腫で、余命一か月と宣告されました。三月初旬に退院した時は、歩けないほど衰弱していましたが、住み慣れた平林寺の森に帰ってくると快復し、広大な境内を散歩するほどまでに元気になられたけれど、五月の連休明けから悪化。しかし、再び入院することは選ばず、点滴もせず、最小限の薬だけで最期を迎え、自ら旅立っていかれました。

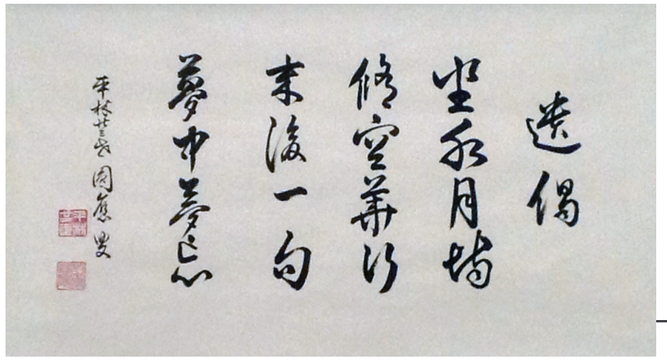
生前につくられた卵塔（らんとう＝墓石）に自ら名を書き、壽像（じゅぞう＝肖像画）も用意されていた老師ですが、遺偈の有無は判然としませんでした。しかし、亡くなられた翌々日、物入れに仕舞ってあるのを偶然に見つけました。誰にも教えず表装し、箱書きまで済まされていました。

それが上に掲げた墨跡です。読んでみます。

「遺偈／水月の場に坐し、空華の行を修ず。末後の一句、夢中に夢忘る」

全文の解説は恐れ多いし、長くなるから機会を改めますが、力強い筆跡からして、数年前に書かれたものと思われます。

用意周到に死を見つめてきた日常と、過剰な医療を拒否し自然に旅立っていった姿こそが、辞世の句でした。そんな師に巡り会えたことは、一生の宝であり生涯の誇りです。（住職記す）



不連続シリーズ

見つけた！